

国有林野 事業の取組

北海道森林管理局

「えりもの森」の充実・ 拡大に向けた取組の推進

1. はじめに

北海道えりも岬国有林は、かつて、明治時代からの開拓、放牧等により森林が荒廃・消滅し、流出した土砂による海水の汚濁で昆布や魚介類の水揚げが減少するなど地域住民の生活を脅かしていました。

このため、札幌営林局（現北海道森林管理局）では昭和二八年に緑の森の復元に向けた治山事業を開始し、これまで五十年を超える緑化事業を行い、現在では海岸林が蘇り、海水の汚濁の改善とともに、漁獲量も回復しています。

しかしながら、現在の海岸林はクロマツの一斉林であり、病害虫の発生時には甚大な被害が危惧されること等から、郷土樹種の導入による混

交林化が課題となっています。また、現在でも、強風等の厳しい気象条件により木本緑化が進んでいない無立地も存在しています。

このため、健全で多様な「えりもの森」を目指して、北海道森林管理局では、地域住民等の参加・協力を得ながら、「えりもの森」の充実・拡大に向けた取組を推進しています。

2. これまでの緑化の取組

(1) えりも岬における天然林の荒廃・消滅

開拓前のえりも岬は、カシワヤミズナラなど天然の広葉樹に覆われていました。しかしながら、明治時代に開拓が始まると、燃料確保のための伐採や、牛・馬・綿羊の放牧地の

開拓などが原因で天然林が減少し、さらに、えりも岬特有の強風で大地は急速に砂漠化し、赤土のはげ山が連なる光景は「えりも砂漠」と呼ばれていました（写真1）。

大地からは土砂が流出して沿岸が黄色く濁り、魚類の減少、海草類は根腐れにより、水揚げ高は激減しま



写真1 昭和28年頃のえりも砂漠



した。また、飲料水も汚れ、戸を締め切った家の中にも砂が舞い込むなど日常生活は大変困難なものでした。

(2) 治山事業による緑化の取組
荒廃したえりも岬の緑化を進めるため、昭和二八年四月に「えりも治



写真2 これまでの植樹により緑化された地域

「山事業所」を開設し、本格的な緑化がスタートしました。

緑化の取組は、はげ山に草を根づかせる「草本緑化」から木を植える「木本緑化」へと進められましたが、えりも岬特有の強風、夏の濃霧による短い日照時間、冬の土壤凍結等により、緑化の取組は当初、困難をきわめました。

しかしながら、草本緑化では、海岸に打ち上げられた雑海藻（ゴタ）を種子と肥料を播いた上に覆い、飛散や乾燥を防ぐ「えりも式緑化工法」を開発、これにより、はげ山のほとんどを草本によって緑化し、続いて、木本緑化を行ってきた結果、現在では緑豊かな森林が蘇っています（写真2）。「えりもの森」の再生は、魚介類



写真3 地域住民も参加した森林づくり

の水揚げ高が急激に伸び、昆布類の品質も著しく向上するなど、地元の基本産業である水産業の振興に大きく寄与しています。

これは、緑化事業に対する長年にわたる地域住民の参加・協力により実現したものであり、緑化の取組を通じて森林の大切さや森林再生の難しさが広く理解されたこともあって、現在でも地域住民やボランティア団体による植栽・枝落とし等の森林づくりや普及啓発活動が継続して進められています（写真3）。

3. 「えりもの森」の充実・拡大に向けた取組

このように「えりもの森」は水産

業の振興と地域住民の生活環境の改善に大きく寄与していますが、現在の森林は先駆樹種としてのクロマツの一斉林であり、病虫害の発生時には甚大な被害が危惧されること等から、次のステップとして、カシワやミズナラ、ハルニレなど郷土樹種の導入による混交林化を進め、災害に強い森林づくりを地域住民等の参加・協力の下、行っています。

また、現在、草本緑化は概ね完了していますが、木本緑化が進んでいない無立木地も存在しています。特に、岬の先端では強い風があらゆる方向から吹くため、これまでの技術では木本緑化が成功しませんでした。

さらに、このような気象条件が特に厳しい箇所では、草本が枯れ裸地が露出している部分もみられるなど、不安定な状況となっています（写真4）。

このため、「えりもの森」の充実・拡大に向け、これまでの取組の中で蓄積してきた緑化技術をさらに発展させ、新たな木本緑化に取り組むこととしています。



写真4 「えりもの森」拡大予定地

4. おわりに

北海道の国有林においては、「えりもの森」以外にも、砂坂海岸林（江差町）、メークマ海岸林（稚内市）、止別海岸林（小清水町）等において、山火事や、燃料・資材を得るための伐採などにより海岸林が消滅していました。しかしながら、幾多の試行錯誤を経て、現在では海岸林が再生されており、その結果、地域産業の発展に寄与するとともに、緑豊かな生活環境・自然環境を創出しています。北海道森林管理局では、このような海岸林の役割が将来にわたって果たされるよう、今後とも引き続き、適切に維持管理していくこととしています。